

聖霊降臨の主日

ヨハネ 14・15-16, 23b-26

2013.5.19 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 竹延 真治神父

聖霊降臨は、教会の大きなお祝い日の中でわたしが一番好きな日です。教会の公教要理、今で言う入門講座の中で、わたしはこんなふうに通道者に尋ねます。「教会の中で一番大切な日は何か知っていますか」。「クリスマス」って答えてくれたら嬉しいです。「実は、クリスマスじゃないのですよ。一番大切な日は復活祭、イースターなのですよ。二番目がクリスマスという人がいるかもしれないけど、わたしは、第2は聖霊降臨だと思います」。そんなふうに通道者に答えるきっかけができるからです。でも、実を言うと復活祭の日よりも聖霊降臨の日のほうがわたしは好きです。なぜならば、復活祭のその前の前の聖金曜日の典礼では、わたしたちは十字架でイエスさまが亡くなられたことを思い起こします。「殺せ、殺せ」って劇の中で言うじゃないですか。そして、イエスさまの苦しみや、わたしたちは罪人だということを思い起こしたその翌々日に「復活おめでとうございます、皆さん」、そんな急にわたしたち変わるものなのではないか。自分の人格を疑います。聖霊降臨の日は、復活という出来事の本当の意味をわたしたちに悟らせてくださる日です。ですから、復活祭から49日、つまり7週間あとのこの聖霊降臨のときにやっとわたしたちは「復活おめでとう」と心から言えるのではないかと思います。

入門講座のときに一番説明に困るのは、「復活とはどういうことか」。「聖霊とは何ですか」というキリスト教の中心的なことについてです。わたしはその二つのテーマのときは、通道者から質問がないことを祈ります。復活についても聖霊についてもわたしは上手に説明できないのです。私の弟は、幼児洗礼ですけれど、長い間教会を離れています。弟の子どもたちがカトリック校に通っていた時、お父さんのためのカトリックの入門講座みたいなのをその学校で開催していて、そこに、教義をととても分かりやすく説明する日本人の神父さんがいらっしゃったのだそうです。それで、弟はずっとその入門講座を聞きに行き、「よく分かる」って言っていたのですが、「復活の話になったらあの神父さんは急に飛び越えて話すようになった。あれでもう分からなくなった」と言って、それからはその要理のクラスには行かなくなりました。復活は、わたしが説明したとしても飛び越えている部分があります。聖書もイエスさまの受難と死については本当にくわしく順序だてて書いてくれているけど、

復活の記述というのはなにかよくわからないのです。わたしの弟みたいに理詰めで考える人にとっては、復活っていう出来事は理解できないことなのですね。復活という出来事をよく悟らせるのがこの聖霊降臨だとお話ししましたが、実は、カトリック教会は聖霊についての説明があまりうまくないのだそうです。一番上手なのは東方教会。ギリシア正教とかロシア正教の教父たちは、聖霊についで長い本を書いて、聖霊について詳しく述べました。プロテスタントも、カトリックよりは聖霊についての理解を理論的に説明しているみたいです。

カトリックは、理屈で聖霊を説明するのではなくて、聖霊に照らされた方、マリア様を見なさいと言います。「聖霊とはこうですよ」と説明するよりは、「聖霊に照らされた人はこんなふうに変えられるのだ」ということを、マリア様や聖人を通して示すので、言葉であまり説明する必要がない。わたしはそのやり方はとってもいいと思います。いろんな料理を、テキストで「こんなふうで作って、材料はこれこれで、こんなふう料理するんですよ」と教えるよりは、「見てみなさい、こうやったら料理ができるんですよ」と実際に示すほうがよく分かるでしょう。カトリックのやり方、わたしはそんなに悪くはないと思うのですが、理屈で説明するのに本当に下手です。前置きが長くなってしまいましたが、わたしは2、3の例から、聖霊を受けたら、どんなふうに人間が照らし出されるかを、言い換えれば復活を体験するのかを、少しお話したいと思います。

わたしは神学生の頃、方南町の修道院から神学校に通っていたので、日曜日にこの高円寺教会にお手伝いに来させてもらいました。寺西神父様の頃でした。わたしのここでの奉仕は、六角堂、入口の脇の建物に待機する案内係でした。初めて来た人や教会に久しぶりにいらっしゃった方の案内する役目だったので、神学校に行ったら「君は、司牧実習は何をやってるの？」と聞かれるのですが、他の神学生たちは「入門講座を担当しています」とか「教会学校をやっています」とか。わたしは「案内係です」と答えていました。最初は、神学生として、何も自慢できないような仕事を恥ずかしく思いました。でも、神学校を終えた時には、案内係というほんとに素晴らしい仕事を神さまから与えられたなど、感謝でいっぱいになりました。案内係は、まず来る前に教会入口周辺を掃除して掃き清め、そのあと、六角堂で来訪者を待ちます。初めての方がいらっしゃるといのはそう頻繁ではなかったと思います。めったに教会にいらっしゃらない方が久しぶりに来られたり、ご年配の方や病気でしばらく教会を留守にされていた方がお見えになった時は、中に入っただき、「いつ洗礼を受けたのですか」、そして「どのような毎日を送っていらっしゃるのですか」というようことを、少なくとも30分ぐらいは聞かせてもらいました。長い方

は1時間とか1時間半お話しをうかがうということもありました。そうしたら、その人がここに来るまでには、神さまの導きがあったのだ。神さまが呼びかけなかったらこの人は信者にはならなかったということがはっきりわかってきたのです。そして教会に今日いらっしゃったのも偶然ではない。神さまが今日この方をお連れしたから、今日この方は教会にいらしたのだということをいつも確信するようになりました。案内係の仕事はわたしの信仰を確かにし、わたしの信仰の肥やしになりました。帰りにほとんど全ての方がおっしゃるのは、「わたしのようにつまらない話をよく聞いてくださいました」。でも、ご自分の信仰を語ってくださる時に、何一つつまらない話などありません。きっと今ミサに与っておられる皆さん一人ひとりが今日ここにミサに来るまでの理由をわたしがお聞きしたら、「つまらない話はひとつもなかった。それぞれの中に神さまが働いていらっしゃる」、そうわたしははっきり言えると思います。一人ひとりを教会に導き、洗礼を受け、今日のミサにお連れするのは聖霊です。その聖霊は案内係の信仰までも奮い立たせたのです。

大阪のある教会で、わたしは今年の春まで主任司祭だったのですけれども、高円寺教会の案内係の経験あるから、電話での対応とか、来客の対応にとっても気を付けるようになりました。電話の対応が親切だというただそれだけの理由で何度も感謝されたことがあります。それも高円寺教会で受付の対応の仕方を教わり、来る人をみんな大事にしなければならないということ、教えていただいたおかげだと思います。教会の電話一本受けるときでも、聖霊が働いていらっしゃるなど感じる場合があります。

もう一つ、ここに今回来る前のことですが、わたしは長い旅が好きなので、新幹線ではなく高速バスでこの前の月曜日に大阪から東京に来ました。そのとき、ちょうど名神高速道路でリフレッシュ工事を行っていたので、名神で2時間半遅れたのです。そして、中央高速道路もリフレッシュ工事をやっていた1時間半、合計4時間遅れました。8時間で着くはずのバスが4時間遅れ、12時間の長旅になりました。バスの運転手さんが、長野県の伊那のあたりのサービスエリアで交代しました。伊那まではJR関西、伊那から東京まではJR関東が担当でした。JR関西の運転手さんは、「遅れても払い戻しはしませんよ」というような説明で、「お急ぎのところ大変遅れて申し訳ありません」というマニュアル通りの対応でした。ところが伊那で替わったJR関東の運転手さんは、違いました。もちろん、「遅れて申し訳ありません。皆さんは名神高速道路で2時間半遅れて、このバスは今でも2時間半遅れているのですが、更に、中央高速道路の八王子の先で集中工事をしていて、更に1時間以上遅れが予想されます」という対応は前の運転手さんと同じくマニュアルどおりでした。しかし、

さらに、こう言うアナウンスが流れてきました。「本当に申し訳ありません。でも、皆さん、今日のような晴れ上がった天気で、今日は山並みがくっきりとご覧になれます。あそこに見えるのが南アルプス。バスは、これから岡谷で諏訪湖を臨んで、左側に八ヶ岳、そして甲府盆地に行ったら、逆側からの南アルプスをご覧になれます。そして、ひょっとしたら富士山も進行方向に見えるかもしれません。この景色をせめて楽しんでいただきます」。そして、スケジュールでは小さなパーキングエリアで止まることになっていたのですが、「ここだと何も買う物がないので、もっと大きなサービスエリアで止めることにします」。更に2回、予定外のトイレ休憩を入れてくださいました。それも、なるべく快適なサービスエリアを選んで。それから、東京都に入って、八王子とか日野とか、高速道路の途中のバスストップで、「お急ぎの方はここで降車し、JRとか多摩モノレールとかにお乗り換えになったら時間が短縮できるでしょう」、そのような細かい案内でした。わたしはそれを聞いて、このバスに乗ってよかったな、地理の勉強もできたし、こんな事態が起きたときにはどんな対応をすればいいのかと教えていただいた。たびたびのアナウンスの声にわたし以外の乗客もずいぶん元気づけられたと思います。わたしは降りるときにその運転手さんを抱きしめたくまりました。バスが4時間遅れるというのは全然プラスの出来事ではない。つまり、無かったほうがよかった体験かもしれません。しかし、この出来事によってその運転手さんから学んだ危機のときの対処方法がわたしにとってすごくプラスになりました。マイナスの出来事さえも、プラスへと変えてくださるのが聖霊です。

もうひとつだけ、例を挙げさせてください。ここに居られるパリミッションのシェガレ神父さんもおいっしょでしたが、修道会の管区長の集まりが一昨日あり、わたしは管区長の代理でその会議に出ました。震災地の仙台の平賀司教様が講師としていらっしゃって、震災のときの体験をお話ししてくださいました。震災当日、2011年3月11日、司教様は翌日京都で会議があるので、京都に向かうため東北新幹線に乗っておられました。仙台から大宮までノンストップの特急で、ちょうど2時26分、震災があったとき、司教様は福島県のトンネルの中で地震に遭われて、その新幹線は急停車したそうです。2時46分に止まってからずっと、「このトンネルの中にいる方が安心だから、この中でお待ちください」というアナウンスが1時間ごとにあって、夜8時におにぎりとかカロリーメイトが配られた。そして、救出されたのは翌朝9時。JRが仕立ててくれたバスにトンネルの出口で乗って、福島県で降ろされて、なんとか仙台の司教館まで帰られたそうです。けれども、テレビも電話も不通で、津波のことなどがよく分からなかった。仙台教区内の教会がどんな様子かも数日間分からな

かった。分かったのは、3月16日にさいたま教区の谷司教さんと、新潟教区の菊地司教さんと、カリタスジャパンの神父さんが車2台で駆けつけてくれて、ようやく全体の状況が分かった。そして、駆け付けた司教さんたちが復興の本部を建てなければならないとか、いろいろな対策のアイデアを出してくださった。そこから仙台教区の復興が始まったのだそうです。

もちろん、仙台の司教様のお話を聞く限り、危機管理については何も準備が出来ていなかった。震災という出来事は無ければよかった。あのことがあったから全てがめちゃくちゃに変わってしまった。なければよかったのだけれど、あのとき震災が起こったことによって、別の新しい関わりができた。よその教区との関わりは今まであまり無かったのだけれど、日本全体の教会が仙台教区をサポートしてくれた。そして、今まではほとんど知られていなかったが、教会に来ることができない外国人がたくさん被災地に住んでおられることが震災によって明らかになり、外国の方々と交流ができるようになった。そして、札幌教区から那覇教区までが、岩手、宮城、福島などのあちこちの教会に拠点を設けて、教会の人や、むしろ教会の外の人に向けて支援活動を始めた。カトリックという名前をなるべく言わないようにしているのに、「ありがとう、カトリックさん」という言葉が聞こえるようになった。教会は内向けのためだけに存在するのではなく、むしろ外の人に向けてあるのだということが分かるようになった。

聖霊というのは、良いことばかりのときには何も起こらない。あのことがなければよかった、こんなことは受け入れたくないというような出来事が起こったときに、わたしたちを外との交わりに追い出して、新たな関わりへと招いたり、バラバラだった関係が一つになるようにわたしたちを向けさせるような、そういう力が聖霊だ、そんなふうに仙台の司教様はおっしゃるように思います。

わたしたちは聖霊を受けています。イエス様が亡くなられて、なんにも良いことがなかったにもかかわらず、教会が生まれました。弟子たちは、イエス様という柱を失ったにもかかわらず、イエス様の愛を人々に伝えようと出かけ始めました。皆さんの中にマイナスの出来事はないでしょうか。このことさえなかったらわたしはハッピーなのに、そんな出来事の中で、でも違う新しい関わりに向かって神さまは私たちを派遣されているのではないのでしょうか。

高円寺教会のレベルで、東京教区のレベルで、わたしの家族のレベルで、わたしのレベルで、聖霊降臨の出来事を、復活の意味を伝えるような出来事はないですか。それをわたしたちは今日、黙想の材料としていただきました。